詞花和謌集

特別
イ 4
3163
3(5)

貴
14
3163
3(5)

近衛天皇
天養元年六月
藤原顕輔

都城
神宮
乃之記

詞花和歌集巻第一

春

堀河院御時百首哥奉りけるに春立心を
よめる　　　　　　　大蔵卿匡房

氷ゐし志賀の唐崎うちとけてさゝ浪よする春風そ吹

寛和二年内裏哥合に霞をよめる
　　　　　　　　　藤原惟成

昨日かも霰ふりしはしからきの外山の霞春めきにけり

天徳四年内裏哥合によめる
　　　　　　　　平兼盛

ふる里ハ春めきにけりみよしのゝみかきか原ハ霞こめたり

ちしめく霞の衣をたてゝよめる　　道命法師

とまさふにわかれうつ鶯の初音や春の人や関次

題しらす　　　　　　曽祢好忠

宮こにハえく若菜を摘にの末之晴間に山への里

冷泉院春宮と申ける時百首哥奉りける
よめる　　　　　　　源重之

青柳の糸に鳴くまつ風のたよりにまつ鶯の声やとゆらん

鷹司殿の七十賀の屏風によみ侍ける

かすかのゝ雪を若菜にまかへつゝ

　　　　　　　　　赤染衛門

子日しにいへかも枝にやとりしに

新院御製

子日すゝまさの野毎よ君か根はひかるしむちはなれ

梅花遠薫と云心を　源時綱

吹く風のやとるもしるこ梅か枝にちらぬ程より香に匂ふらん

梅花をよめる　右兵衛督公行

梅の香を白ひもと来る人ぞ見てありとも見えぬ宿の主

題しらず　俊恵法師

まことにや風のまゝに梅の花宿にをきゆく人の袖よりも香の風ぞかほる

僧都覚雅

とし経ても花のこゝろやまよふらん霞の中にとはぬ山里

天徳四年内裏哥合によめる　平兼盛

さほ姫の霞の衣をりかけてまつほとすぎて春の山風

賜左大臣の家の哥合によめる　源季遠

いつも風吹くにも見えぬ春風にむすぼゝれたる青柳の糸

咲とくイ

吉野の桜をよめる　源道済

吉里の桜にさきの柳こそ春をまちけるみどりの色

題しらず　源頼政

三山の霞の梢をとりて梅はなの花にまさりて匂ひけり

京極前関白太政大臣の家の哥合に　康資王母

よめる

紅のうすき花さく梅の枝にいつかへて寝覚とはまし

この歌を判者大納言経信これを庭の梅は詩まつれるにをかしくきこえしな

さくらを風もあらしの　康資王母乃
よみつゝりける　京極前太政大臣
白雲ハ立へたつれと紅乃うす花桜心にそそむ
る　康資王母
白雲ハさとも立へたて紅の花の色こそ見えわかれけれ
おなし歌合によめる　一宮紀伊
あさまたき風にまかせて山桜つほめる花にかゝるしら雲
白雲とみえつる花にたちよりて吉野の山の花さかりかも　大蔵卿匡房
承暦二年内裏後番歌合によめる
大納言公實
山桜樹もみなこほれる梢から花は雲とそかゝりける

遠山のさくらといふ事をよめる
落葉院出雲
九重のうちより白雲と見えつるハ大内山のさくらなりけり
たいしらす　戒秀法師
立ちかへり見よと思ふ梢ハ嵐に散る桜なりけり
立しら川にかれ見るまにかりそよめる
源俊頼朝臣
白河の花の梢を見渡せば桜のみをさかりなりけれ
吹く風のさくら花をはよそにも見む
白河院御製
春風に花の梢をそよかしつゝ里のさかりのこゝろもしらぬ
つゝしつゝ家の郭乃山ほとゝきす

邊梅花

源師賢朝臣

梅花の枝をこゝにおりて侍りけるを、波のかけるとて、
一條院の御時、この八重梅を人のもとにまゐらせ
てのち、あるよ侍りけるあけぼのに、その花を題
にしてよめる

藤原大輔

八重のみ乃新院の御時おりて百そのうつりかはる
よゝのあつ

右近中將教長朝臣

吉野山ふかく入ゆきて梅をとりて
人くにまゐりて侍りけるとて

源養平

梅花をこゝにおりて侍りけるを、人のもとにつかはす

道命法師

たゝ一人
まゝこ小ぶねに梅花をとりつゝ流れ行ぬるかな

吉野山梅花の白雪やまさるゝ人もつゝみかねつゝ

源忠季

中くにおもしろかりしやどかな梅の盛よりうつりかはる

さくらの花ちるとみるまでうつりかはる

梅花ちりてちかとりてゝ

天延元年

藤原元真

梅花ちりてちかとりてゝ

大中臣能宣朝臣

梅花風にちりまがふこのもとは雪ふるさとにあらぬ
なりけり

人しれぬ思ひをのべて春の日のうらやましくもなる
かな

よ硯のそこのみなそこにかくれにしかなしきかな
ちりそめにけり

梅津

梅の花散てのちは春の日のうらやましくもなる
かな

ちり積もるとのみ見えて高雲の春の風にぞ
まがふなりける

源俊頼朝臣

梅のちりつもれる所のもとは雪ふるさとにあらぬ
なりけり

源師賢朝臣

梅咲て水ハ流れし数ならぬ花の渕とぞなれ
ぬる

藤原道房朝臣の家にて出入指図とい
ふことをよめる　　藤原範永朝臣

数ならぬ身とは思へどやいかなる山ぢの心なるら
ん

庭の梅乃数と思へてしらぬ女房ひろう

花山院御製

我宿の梅の花もちる時ぞ人ふかくまれなる
さとのなりける

源俊頼朝臣

月に似てはなよとまる花ぞかなくちるなみの浪りけ生
落花満庭といふことをよめる
花薗左大臣
庭もせに積れる雪と見えながらかをりぞ花の絡せける
たいしらず
大中臣能宣朝臣
ちる花をせきとめてや山河にうかふも色に見ゆるかな
寛和二年内裏の歌合によめる
藤原長能
一重にもあるを白妙にしもなく八重咲かゝる山吹
藤原家定女乃家に所合によめる
よみ人しらず
八重さけるひとへわかうの桜は色もにほひもことなる

崇徳院御時百首の歌たてまつりけるによめる
太皇太后宮大夫ひく
あだ人をまつかはしのよそに鳥なれ待まつらんとこそきく
新院位におはしましし時牡丹をよませ
給ひけるによみてたてまつりける
関白前太政大臣
咲きしより散るまで見しほどに花のもとにて二十日へにけり
老人惜春といふ事をよめる
播後徳
老いぬれば秋春の惜しさは過ぎにしと思へば
三月尽日人々のともにたどり集まりてよめる
の暮めるかとよませてかひろかなりけるかな

世をすてゝ
かゝるこゝろのうちにさとりをこそ
あやまるこゝろのかるんぢうつゝ
き

新院御製

詞花和歌集巻第二

夏

卯月の一日ふよめる

増基法師

ふるゝ人をたゝ
たゝ
たゝ

原俊朝臣

雲居をぬけてこそさきもそめよかしかりん
秋院長宮の
の桜乃つゝひて侍りをめ〳〵きに
人のいそ〳〵侍りをよめる

大弐乃長房

年をへてくらしなれたる

神ノ山ノ上ノ山ノ　源宣昌

柳ノ下ノ夜ノ山ノ中ノ　関白

都ニ住テ　関白法門伝

昔ノ心ヲ知ル人ハ都ニマツ忘レテ月ノ光ノ

関白ノ子改ノ家ノ　時名ハ忘レタリ

くヽ十ヽ　つくよまもとこ

時名ハ忘レタリ　茂原忠重

たヽ　花山院内製

と寺ニ住ノ聖ノ

山寺ノ上ノ　時名ハ忘レタリ

住ノ上ノ　ものもれてよめる

山里ノ　道命法師

たヽ　紙屋法師

山ノ上ノ　都ニ住ノ

時名ハ忘レタリ　茂原俊家

まつ狂ハ　大納言公教

雨中　時名ハ忘レタリ

鳴ノ上ノ　源俊頼朝臣

たヽ　清輔　院堀川

[illegible]

よよのうち

緑なさく水鶏矢の戸をゆて後こそ[illegible]

たゝ[illegible]す　　皇太后宮大夫俊成

五月雨の日[illegible]に[illegible]川やさきの浪たて[illegible]

堀河院[illegible]時百首[illegible]

[illegible]　　大納言経房

右大臣の家[illegible]

[illegible]　　源忠季

郁芳門院のあやめ[illegible]

[illegible]　　中納言通俊

[illegible]浦[illegible]

菊原通宗朝臣[illegible]

[illegible]　　良暹法師

五月[illegible]

[illegible]

[illegible]　　花山院内侍

[illegible]　　菊原経衡

うちつけに白き扇子の花のかげにて夏をしらする
贈左大臣の家にて歌合し侍りけるによめる
修理大夫顕季
なかなかに扇子の花盛いくあまたの春をことにみる
寛和二年内裏歌合によめる
大貳高遠
涼しさはこゝろ扇の風に八重ひとへとこそおもひわかるれ
六條右大臣家にて歌合し侍りけるによめる
よみ人しらず
夏月涼しくはなき世の空風に涼しく涼みなりけり
水無月納涼といふ事をよめる
藤原家経朝臣

風ふけば浪の涼しくよる波のよるさへさらに涼しかりけり
よみ人しらず
藤原好忠
松風の声のきこゆるさ夜ふけて涼しき秋の風ぞ吹ける
長保五年入道前太政大臣の家にて歌合によめる
源兼澄
夏の夜の月のかげさへ涼しくて夜風のたちまちの風ぞ吹く
曾禰好忠
題しらず
涼しさはしばしとまりて過ぎやらぬ風のさそふこゝろにぞある
閏六月七日よめる
大宰大貳藤原
常よりも秋にちかしとみる七夕のあはぬ夜しよきにもあるかな
よみ人しらず

下紅葉一とせ数まれりとみれど秋を知りぬる時の数かな

出の浦とはるさめ打ちけぶる秋とりのなかるる花ぞ

詞花和歌集巻第三

秋

題しらず　　曾禰好忠

山城のとたこの前とうち波をかけさせて稲葉の風

津のくにもうち結ぶ氏大江ためもとら

仕りそくのかりぬるいひつるかな

僧都清胤

あきはぎ咲けば地とぞ成りぬる四の野の秋は秋の風

七月七日式部大輔資業うたよめる　　橘元任

萩のうへにかかる露とぞ思へる天の川原の秋の風

七月七日よめる

まつしらくも

七夕は衣をぬぎてうるはしきかみをとくべきこころなるべし　花山院内大臣製

兼盧二年内裏歌合ふるめく　菅原頼孝

七夕の心はすでにとけぬれどいまだ　藤原左衛門

いろかはらぬそらをうらめしく　新院のおりせこと　右京大夫影浦

ふるめく

天川よこさるやいなや七夕のそらをたえぬ雲の紅の袖　大中臣能宣朝臣

寛和二年内裏歌合ふるめく

七夕の衣をぬぎてうるはしきかみをとくべきこころなるべし　花山院内大臣製

兼盧二年内裏歌合ふるめく　菅原頼孝

七夕の心はすでにとけぬれどいまだ　藤原左衛門

いろかはらぬそらをうらめしく　新院のおりせこと　右京大夫影浦

ふるめく

天川よこさるやいなや七夕のそらをたえぬ雲の紅の袖　大中臣能宣朝臣

寛和二年内裏歌合ふるめく

ちりのこるはなのうらかぜはこしのかたにとどまるかぜかな　俊成大夫影浦

七夕のたえまをまちてこよめく

天河のたえまをまちてこよめく　俊成大夫影浦

橋のうへつかのまのあけぬるかなとよめる　藤原為家朝臣

後鳥羽の宮とよめる　良経公

五月雨の雲のうへにてなほ七夕

七夕の橋のうへにてなほ七夕　藤原影綱朝臣

たえまをまちてこよめく　藤原為家朝臣

天河の岸のあさかぜ　説部成仲

三条右大臣の家にて八月十五夜よ

水上月をよめる

水流とやとよろの月の新しきやうに代を君ともちんと思ふ　源順

たゝしいと長く用ゐ光るの月新の新もとゝ不思議まさるべ

家ゝ奇今しきりにまろ不ふるあり　右大臣

巻文とこそやうの秋の月花月をいく思まさるべ

月と共流してよまさるべ　左清門猶家城

秋中のあるべ中とも秋中の月を宮人

たゝい　三條院御製

色ふかもあるも世中ふるの思ふ秋の月花月

関白太政大臣の家にてよめる　義孝卿

秋の月ひえの山の山の端にかけもとまるかりの

ひえの山乃会仏よのりて月とともに

めり　良暹法師

京風をふるの秋の月花

京極太政大臣家の奇合にまるあり　源重之

秋の月ふかのひとをもとなる人と悩む

関白太政大臣家にて八月十五夜のこと　義孝卿

よめる

ひく弱ふ新とあ　義孝卿

右清門猪家成ら家ノ会ニ
秋の夜ふかくもとめあり　隆源法師
月をまちて夜ふかくなる秋の
月をなかめてとよめり
秋の月なかめつくしてひやうしいとしと思ふ
月なほ山水といふ名をとよめり　大江嘉言
嵯峨山の清水ハ人間ふかくやとれる月をとて
寛和二年内裏歌合ふかくまれる月をとて　藤原忠通
秋の長月ふかくのあかれぬやあるよりとも思ふ
花山院御製

たゝ
秋ふかく海ふかくなれる秋の夕べ　源道微
秋のふかきやは秋の月にこそ　大江嘉言
秋ふかくいかなる色にか月をとて　和泉式部
秋ふかくいかなる色にか月をとて　曽禰好忠
ふかきかなさよ清よりそなる秋ふかくなれ　藤原敦忠朝臣
秋のふかきは秋の月にこそ　源重昌
秋ふかくなりにけりとよめり

法師へまゐりてなりよさうの花ぬり
ろくさうしてくりまゐらせたりけるよめの
右源清門

秋の雅氏れんろ殿の公とはめしやいんと海ろ兵
かたのろさとよりきこえて結ろ時本院の
まいりたまふとよめる
とよめる
縁子内親王

神祭のかりこそのはへ鶴ろ毛白ゆかりの
鶴の院院時百そ年をろよめる
隆源法師

やうれさろ人の一ふ蘭ろ枕野毎ゆとろ人まり
白の院鳥羽殿にて有義ゆ世きをろ

よめる　橘為仲朝臣

高砂のおのへの桜咲にけり外山の霞たつなゆめ

天禄三年女院五十賀の時の屏風の歌

橘正通朝臣

春風のかをるとともに白雪のふりかとぞみる

大江匡房

物思とよめる

あすからは若菜摘てん雪の内の春とはいへど人の

永承五年十一月内裏歌合よめる

出羽弁

関人のおとせぬとこそ聞しかたい〳〵人の

康和六年六月十五日内裏歌合

藤原仲家

秋萩とまの松よりはなれたる庭の秋をぞ思ふ

九月十三夜十五夜より月遅く出るを見て

まさ子内侍

秋の夜の月の出遅くなるをいかにとはまし

新院御製

雲ゐなる宮の内にはあれど月をしぬ

源雅光

春ごとに花の盛りはあれど

道命法師

上東門院

上東門院

春雨のあるかなきかにふるほどは

曽禰好忠

事しとよめる　　堀河右大臣 頼宗
関こゆる人よ問やみちのくの安立乃まゆみ紅葉
武蔵の雲よ身のをり待りつよ三河の
国二山の紅葉とみてくよめる
橘俊元
谷くれ九丈女紅葉氏錦小あれ一村乃山とらん
寛治元年太皇太后宮の歌合によま
める　　大蔵卿匡房
冬風行らそ吹紅葉のちさゝる山やこそ越すらん
たゞ一ーれ
曽禰好忠
山里八ゆきこの色見よ秋の末風ふかれなり
志より法輪寺にまうでゝ待る林大

井河よ紅葉のひまもなく流れけるをみて
よめる　　道命法師
去年秋も杉の徑の雨ふ紅葉乃移し支しく
雨後落葉といふ事をよめる
源俊頼朝臣
名残なく時雨の空ははれぬれどまださゝ降るは木の葉なりけり
月のあかき夜紅葉の散るとみてよめる
平兼盛
あ風て月もさまね秋寂の秋の木の葉をも風もけり
一条摂政の家の障子よあしろよ紅葉のひま
きくより来るかさくさきるゆへをよめる
藤原惟成

秋深く紅葉の錦て織出すものとかはくるかな

大中臣能宣朝臣

初雪を雪とは見しかたかたかたかたの雪の雪

雪中の月を雪とはしらすとよめる

前大納言公任

但見人秋の月はかはくるかはくるかはくるかな

詞花和哥集巻第四

冬

題不知

曽禰好忠

伊勢をとして行らんとすれは雪降りて

枝ならぬ所へのちて冬ゝ花ひとりのこれる

家ゝ云合

伊勢

猶ゝてあるとしの数ゝ冬とはなれども

たゝ一人のこれる

左衛門督家成

色くよりとしの時雨小紅葉ゝてあるひとりて

大江嘉言

山深ゝ蔵て積れる紅葉ゝのゝ上ゝ時雨降過

蘆葉埋水といふ事をよめる
惟宗隆頼
ところ〳〵のくもれるやとはしらねともくものうへにそかりなくなる
落葉満水といふ事をよめる
風吹ハならの枯葉のそよ〳〵といひ合つゝいつち散るらん
曾禰好忠
外山なる柴の立枝に吹風の音聞をりそ冬は物うき
よみ人しらず
秋ハ猶来ぬとそかりき月ハ冬にそ成にける
東山百寺をかみ侍りけるに時雨のしければよめる
左京大夫道雅
錦にも山めくりする時雨にはいつくのさとかぬれしとはしる

聴時雨といふ事をよめる
瞻西上人
唐土も風新よさとの曇とこれ時雨哉
天暦御時御屏風に網代に紅葉ちりかゝりたるところをよめる
平兼盛
深山より落来る嵐のこゝろにハ網代にそ紅葉の錦なりけり
鷹狩をよめる
藤原長能
霰ふるかた野のみのゝかり衣ぬれぬ宿かす人しなけれは
堀河院御時百首歌奉りけるによめる
大納言匡房

山ぶきのはなの色にそめられし櫛にそやくもの雲と成れる
大和守ときて行くの時入道左大臣殿の御
ゆえ和歌をよみてくるめり

前参議義忠卿歌

たい

大蔵卿匡房

奥山のいくたびか紅葉踏分て鳴鹿聞ぬ年の暮かな

大江和元

ふるとしのきはまりぬれば思ふかの雪ふるさとの雪ふるとも
新院くるまをかりて御幸の時
とりあへずとてまゐらせられける

閑白殿左大臣

紅ふかき民元精も雪降れば思ふかの雪ふるさとの雪ふるとも

たい

和泉式部

まつ人の心とともにくるとしの人の心ぞ恨めしき

山蔵寺の公とらめり

成尋法師

数ならぬ身をもなげかぬ年なれば老の人とともにくるとし

曽祢好忠

かまくらのとりかぶとのよりうり
くるまやまこもあるんこそ

詞花和歌集巻第五

賀

一條院上東門院に行幸せさせたてまつりたるに

入道前右大臣

君が代は阿武隈川の底清み千年とつもる淵とぞ思ふ

正月一日子の日するに人々まかりつきたりける時

伊勢大輔

ちとせをもかねてしるかな春の来ぬ

梅の花たちのかをりの風ふけば

ちとせをもかねてしるかな

大中臣能宣朝臣

京極前太政大臣家歌合にたてりける
よめる　　大蔵卿　匡房

春の代の雲とぞ見しみ芳野山ふもとの霞はるかすむ限り

長元八年六月治部の太輔の家にて歌合
よめる　　能因法師

春の代の白雲かとぞ見しかの海の波の寄せてかへるを

たゝ　　赤染衛門

柳葉と見るにぞ行末は代々をへぬべき春の風の糸

三条太政大臣賀の屏風の絵に花見たる所
つくりたる　　中務

あかなくに散るとや人の思ふらん春の花見に来てかへるらん

あるひとの子三人はかりまかりてさけをもとめ
又の日つかはしける　　きよたゝのりとも

桜花咲くとはなれぬるあるうちにあるべき春の日数を

天禄三年三月晦日后宮歌合
　　後冷泉院御製

桜花散りぬる春の名残をしみ春の日数を

長保元年六月廿二日内裏にて
上東門院の御屏風に
　　大納言公任

うちとけて寄せぬ波の情をしいかでか春の日数を

松原池といふまくと　恵芝法師

[illegible]
後三条院のもとにまうてゝよめる　法人[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]　大納言経信

詞花和歌集巻第六

別

[illegible]　民部卿

[illegible]　和泉式部

[illegible]　源俊頼朝臣

橘則光朝臣の八人ちの四月うえまてとうの
きろうの餞に侍りてよめる　　藤原輔尹朝臣

さきりのく秋の三月にまれ別れ八人乃こゑ久
とのの月きろの女れ秋夜のくうり秋名ろ色よ
ま明りろ小いひつろ　　きろ

四月ふむ行とてきろて出ぬ人やとも月の別ゆきう
大納言行信卿幸所にて　　藤原道經
きりよまま明りあひくらめろ

六月ま六日君八きまさん行信卿ハ三月ハ三月ハ
　　清原元輔

つ〇よ行きろ女ろ〇のひくろ行ま女ろ
ろよ餞に〇のふてくまを行ろ
　　一條院中宮

あろ〇寺日よ〇ひうひ〇ひあよ〇ハ時雨ハ降を
ま子ろよ行きろ〇のおやまよてて人の
ま人ま明りろ〇ろ〇ろ〇ろ〇ろ〇ろ〇ろ〇ろ

別れ行ま〇ま〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ
月〇ろ人の〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ〇ひ
日ま〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま
　　法橋成尋

又〇ひと行き〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま〇ま
　　玄範法師

とろこしくまくろ給ひて人のいさゝか侍
られたりける

寂照法師

これよりはるかになりけりとやかくさに住みおる
人のしるを日ころ待くなる日あかし
あひみくてはなる

僧都清胤

此月ならぬをまたもとめ尋く我も人のいのちはおかれけるかな
大納言経信卿宰帥にてくたり侍りける
後頼銘をかけりきこえてひつりしける

太宰大弐甲斐

ならのこと通ひき旅にもなをし給ひて
猶為仲銘をみちの守うそくゝり
たつきの太宰大弐の太盤の下にてりて

御とふらひて
東路をとりかへりて〈そこにてひとしき〉
修理大夫別当参議太弐まそとなし
侍りける馬よくしてつかはしける

權僧正永縁

立別るゝをあなたに松の風も此世の後もかな
あつまへ人めくりきろ人のやとりて侍りける
なのくさまみをちをとまよふ

くはなひき

僖俊麿

ちりしとも銘の別めきこの都
ゆかし人をまちかくて見

むく

詞花和歌集巻第七

春上

春のうちとしてうたよめる　　前白河院御製

題しらず　　藤原實方朝臣

いそのかみふるのの小川の岩ぢ水　　隆惠法師

ゆくすえはいかにかはやとなるらん

堀川院御時百首歌たてまつりしとき　　大納言師房

ひかりのどかにてはるのはなのさかりなるを

題しらず　　平兼盛

谷川の岩まをわけて出る水のこゝろさかんとそ

春立ける日兼香女房のもとへつかはしける

一條院御製

よろづ代をふるとも月のかはらぬはくもゐにてこそすみまさりけれ

永承四年内裏歌合によめる

藤原俊家

我恋はゝなちのこゑもなくていさきゝつまれぬ人をあかさこそ惜

新院にてかはりつかうまつりし時人のかはりに

ことゝはむすまめして猶長のことゝいふを

よまむせぬるかなしきかな

右兵衛督公能（行イ）

くさしける方とをくてやこゝろにほこりゆく人の風のさそ

寛和二年内裏歌合によめる

藤原惟成

命あらはこの年月をあはれ人の世中よきをあまた見つる

左京大夫顕輔か家にて歌合し侍りけるによめる

大納言成通

よゝのあきにかはらぬ事をも人つてなくもしのふこゝろを

たいしらす

寛念法師

世の中はいかにしてもうき人やなほのこる

待かねて孫さ女につかはしける

賀茂成助

いつはりの人のつらさを恨みても猶とゝめかねひとりぬる

たい　　清義法師

女とあひかたらひてのちにさよとゝ恨んの事よりいふかまりてかの女乃

たい　　侍人一寸

絶間法師

あくるとあくるまつ女とゝ

三井寺よりの使

月どへあまりて

あの大納言之給

三井寺といふにまつのと表

僧敬元雅

ていしける
大納言道綱
七夕のさかふる家の庭にてをとりたてまつりしきこしさそことそはへ
並えるまひてそよめる
隆縁法師
[illegible]
[illegible]
寄進といふことをよめる
[illegible]
冷泉院春宮と申ける時百首歌奉りけるに
よめる
源重之
風をいたみいはうつ浪のおのれのみくたけてものをおもふころかな

堀河院御時百首たてまつりけるによめる
修理大夫顕季
我恋は吉野の山の奥なれやおもひいれともあふ人もなき
たいしらす
平祐挙
胸は富士袖は清見か関なれや烟も浪もたゝぬ日そなき
菅原永実
[illegible]
春になりて[illegible]
[illegible]
道命法師
[illegible]
堀河院御時[illegible]

のれ方よ給ふ女と共ひく かてこ給ふ
とおとし人よ このいかてこ ふてこ きこれ
これてこうてつつり きこ
源家時

ふと人の分いふふひて ぎこうこ白雲れ
ぎ 女よりつて

白雲れつ女ぎ ぎれまれこうつてやひ れ
中納言こうこ ふこう家 合よこ

大納言公実 仕

紀のこ武家人こ ひの間 こ ふこうやこ
たい

源道俊

西雲れ間こ ふこ紀よ 地こ ふ 神こ ひこ
古人つ りつ 女のいこ のこ りこ
と 更よ 事 せ 給ふ れ ひつ

源雅光

紀よ間の こ ふ ふ の分のこ
左京大夫顕輔 家よ 斉 給
ふよめ

平實重

長 分こ 前こ ふ こ も の 行
為 り

道命法師

つ こ 八 者 ふ こ り ひ こ ふ 城 こ 彩 こ 道
女 ど 帳 こ ふ こ

藤原左信 朝臣

嫁 八 ふ こ 分 こ ひ 物 こ

ひえの山よりて奇合　結句　心覚法師

題　大中臣能宣朝臣

[illegible]

秋思　源人正

山寺よりて日ごろ結ぶ女郎花

ひつくりて

[illegible]

関白太政大臣家歌合　義孝

[illegible]

[illegible]

題　藤原親隆卿

[illegible]

[illegible]　前院内侍

[illegible]

[illegible]　曽禰好忠

[illegible]

冬の山雪ふかくとも人の分くる

かりてひつくりて

[illegible]

[illegible]　道命法師

[illegible]

家より奇合　結句

[illegible]　中納言俊忠

無優て独ながめやらるるすがの
ゆふ月夜ゆきすりの山滝

詞花和歌集巻第八

恋下

人をつまりてこしいひそうの女のもとへ遣
かるくるくまうりあり者れてかくやいい
ひつとそていくあくす侍れていひ入
そうり名　藤原相如

君と我とをふ公大りくやかれて
たゝ一人　後原さ絶

我恋ハあひ初くそまきうち世風くまの方のちの文のもの
女のもとへ曉ごろ立渡りていひつつ
そうり名　清原元輔

君とをふ海りと寄りとやくくりくく高ふ海風人

左京大夫歌捕 寄[illegible]

よめる　　菅原歌左衛門

[illegible]　　女のもとにつかはしける

[illegible]　　菅原宣方朝臣

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]　　[illegible]

[illegible]

女のなとふまりうきをうちはらひ[illegible]

[illegible]とハえるむしあまきいとをて

[illegible]

たい

坂上明基

[illegible]

恵茂の法師

[illegible]

菅思毋人とつかすとをあり

右大臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

閑さ人出はしめさと落つ山もあるぬ月とうれ
たいしゝ　　ちゝん人しゝ
つゝとて袴さ人と言ふ人ゝとて空の落やつゝき

平公儀

金事や泪の雲ゝとうるゝ人ゝ雨れ嵐て乳を
牛ゝまりもゝ　　きるゝふのぬやゝよゝて人の更
あゝゝさゝふゝて月のきるゝひゝゝく月
えゝうゝれたゝふつけていひつゝ
ゝ

家歳法師

ゝ野の芝ゝ露ゝ　　ゝ月のゝ
たのあゝうゝ　　きるゝ男とゝゝやゝくゝと行ゝふ
ゝへゝゝ竹のゝゝゝ家の後ゝうゝ男と

ゝゝゝゝゝゝゝゝ　　和泉式部

竹のゝふ家ゝ　　ゝふゝゝくゝよ独ゝゝゝゝゝゝゝゝ
行ゝく後ゝ　　ゝよゝゝ男のゝゝゝゝひゝゝ
ゝゝ

さゝゝ月

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

人の道すなわちあり

言語章句部 女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

律師仁祐

大僧正行尊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

詞花和歌集巻第九

雜上

[illegible]

源頼家朝臣

[illegible]

[illegible]

源俊頼朝臣

[illegible]

播磨守よ結る時三月ばかりよ毋うの
ゆり結るふ花のかまへやまちとゝまるよ
奉議為通朝臣まうあそこて侍とこゝて
つゝ　　やまろ　　平忠盛朝臣
かつのまへ花都の花を見ぬ人なとゝ人ゝ毋めて
侍りしありうを花ひらくさてこれ
のいまうもろ　　もゝ　　まゝ
せうひろとこやそこ侍ひてゝ
　　花山院内大臣
　　もゝ　　まゝ
人のもとよまりありまうさて花
ゆとろうて結それてあるふあ
しのもとへいひつかはす　　もろ

ちるはなかなかてうひをはしめ花ふさゝうの花
花を切むしろとゝめろ　　天台座主源恵
　　たのミ　　入道前太政大臣
ゝゝれあらかゝめゝうふうへて無いおの名ゝ
宇治前太政大臣花尺ふ月ゆ
ゝてつかはす　　堀河右大臣
　　たのミ
ゝとてゝんとゝ
二条関白内大臣
せく結るれゝよ毋とゝ
　　小式部内侍

入道摂政は童山峯とつけていうみち
といふ事をくはしくはなされてよめる

大納言道綱母

なげきてはうへとそちふ山ひの色
彩院法ふおりましは自然の花
方ふかんさらめうへのとよことをとめて
菊花を年久といふ事をとりそせはなる

よしのの
雲かゆきさそ菊をはらさしとをくをのみ

大納言師頼

修理大夫顕季卿さうのうちよはなる
さんこいさきのひく右近馬場よりて
時雨のはらふ後子内親王の女房

二車はてきて是者一条殿なし
て明るのよ風ふ吹はなる女房はなる
菊

春はあけぬるとはなるこそいとあはれ
この花せしといひたれてはある

贈左大臣

きりのうちはいとはるる風ふ浪はなるこそ
花清門猪家成布引乃滝ふんよりおりて
寄ものはあるこそ

藤原隆季朝臣

雲のよりつくはなさはるる白玉を布引乃滝こそ
新院法よおりまして時雨ふるそ水

草海老口ずさみ給ふ人給ふ

大納言行宗

たい[illegible]

律師俊芳

[illegible]

父長實伝法灌頂をうけ給ふ

よりかりてのりもろこしに渡る京太文頭

博士より所合　侍従実[illegible]

藤原為[illegible]

[illegible]

月あかく[illegible]

[illegible]

くゆりあんこ[illegible]

大中臣[illegible]

月はあかし[illegible]

[illegible]

よ月のこと[illegible]

[illegible]

小一条院[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四家月とこの事とこまやかなるべし

新院御製

月清見西の海にすむ月の影ぞ秋の雲の上まで

新院位よりおりゐましましける時月のいとおもしろく侍りけるを

ながめ来る女房ようけくまゐりて

左兵衛尉

たぐひなきこの月ばかりあれこそやとりて侍りけるとよ

めり

法師

月ばかりうらもなくすむ雲の上までもとりて侍りけるとよ

さい

円大僧

隠とかくこの歌の中にかくれて千歳の月影をこそ

山家月とこの歌

源道海

ひさかたの雲井はなれて山ぶかみ月をしたのみ

新院殿上にて海辺月とこの題を

平忠盛朝臣

詠

海人をあまたとりあつめたるにかくれたる月をこそ

たづねしか

播磨義弘

高砂と山のふもとに入る月とこの題をよめる

新院御中宮の御方にまゐりて

女房ふねにのりて月の出でるを

立のりもとめてこの月はいまだ出でぬ

あるべきかとこたへけるとよめる

いつる月を詠ぜしかの月新入と名のまゐせさうらん

たい　　花山院内大臣

雪ふる外の月をとはんとて我宿ゝ人を待つらん

月のあるく　　大納言公實

まさしてさきをりをとまるとよ　　中務卿親王

さく梅ひとれて道をくゝ久しく　　大納言

色ゝゆりもろ月はさきぬんとぞ　　大納言

屏風に月をよめのこゝろ　　大納言

新入のこゝろ

月の白雲ゝ　　大納言

雲よ新合　　大納言

雪夜梅　　花宗大史歌壇

山城守　　

乃月ゝ

のいゝ

山陰乃いそ

久しく

中原長國

月やとて春は東にかへりなれと春をしらせぬ人はなし

山しなの寺にまかりてもろふ家にて

よあけくれば出いでぬるまの月のこゑ山ちかくなりぬるかな

月のこゑ山ちかくなりぬるかな

尺くらべあらそひてふる雪の山のかたちは

家にあらはれぬ

林賢法師

雪の中の月

ふけぬ　しらぬ　ちぎりをかはす

もろともに　あはれとおもふ　あきの月

ちぎりをかはす　月のうちにて

大蔵卿匡房

月

ふくるとしあれはあるかの宮にて月に対して春を惜しむ

題不知

ふくるとしあるかの宮にて月に対して春を惜しむ

たうひとつ

あらはしとうとうとう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

たいしゅう　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]

又くらうあり　　赤染衛門

世をそむきたる乃ちの宮を又ぬしなる人のやうに見
世ひくよりはひくらけるよりあり

出羽弁

あの者も片時のうちに物をもかなしの涙のあふれはうハ
きのひさうの男のあり名ゆゑ名をあらハ
きりとてとーのけ〜きてしらあり

和泉式部

あるとき物をいとくあるとていとあり物語
知りくるとひくるふたりとてれこそ
えをんなのふきしきとひくる男
乃ちのふとあり　　大弐三位

人の世ふてひとあるひとの物をハ世ひくるやさしかるべき
見

名誉ふかくて無物をもたる弱ものあり名と
長禎八年宮治部大輔の命
所令　　きろよりもちろ乃とれこそ
きろ見ろ　　ふ海ろてこ高ろく物を
物ろよ

武部大輔　資業

侍従ふ流ふひとあるれろ神のをこ高ろ物ろ
ろの人生ま明りろ道　　人のをのやめとひ
さきあのとをきを物やあることこ世
とあり　　ろ人物をれんよあり

因幡侍

いさゝ川みなゝと掬ひもあへぬまでに涙の玉ぞ散りける

冷泉院へたゝんなをもせばやとてこゝまでせばるゝ

花山院御製

この中ふかうゆきをみる時はいとゝ春とたのまるゝ

冷泉院御製

春へ雪消ぬるゆゑとこのもとをもくまなくとへとも

男とゝらんくとよめる

和泉式部

もゝしきの大宮人はいとなれぬ物とゝ人の歌ハ

清原の國かこそ人とゝふなりてあ

大納言公任のもとへいひつかはしける

藤原清輔朝臣

ひさ方の月の光の清けれハ秋のこゝろ人ゝ知らるゝ

後二条関白ゝ家の歌合に

久れて寒れ沖の雲ハ時雨ゝ

そ降りて女房の中よりいひ入れける

源仲正

三笠山さすがに月ハ出ぬれ

おもひやれ月ハ出ぬれ

西原院にこもりゐ侍りけ

る僧

ゆ山月ハ出ぬれ

平経盛

長恨歌の心をよめる

長恨歌の心をよめる

[illegible]ひろ[illegible]の[illegible]と[illegible]れあさちの[illegible]
陸奥国の[illegible]て[illegible]の[illegible]
[illegible]れ松乃[illegible]

源道海

播磨仲[illegible]

古里に[illegible]ぬ[illegible]
よよ[illegible]て[illegible]
へ[illegible]
ら[illegible]

[illegible]

[illegible]

老て後菊を見ふ間しそあらんめとてうゑまさりそれ
たゝしん　　清原元輔
　　かすが改平
[illegible]
新院のおりせすして百首歌たてまつるふる
め歌　　藤原季通朝臣
[illegible]
[illegible]
[illegible]

新院六条殿にて月の
かくれてくらき夜月をめして月の言
志をいふ事とよまれけるそのころ
ころ

右近中將教長

三月のまつの雪ふるやうにさくらのはな
ちるとてよめる

前太宰權帥實房卿

数ならぬ身もあはれにおもひつるまてとはるゝ
世中さいかくきこえけるとてよめる

僧基法師

秋のくれ森のこすゑに秋うすしこの家乃ぬしやも
秋のはてともきゝなりけるよ

源親元

春落花

春ちるはなにかはるとふるなみの花をもかけぬ
心ちもしつる

二条中宮

ふるさとの春はいかにとはるるに
よの中人をくやしくもあるかな

花山院内大臣

世をてゝ今はとなむ時やまとの梅さく事はいかにあ
はれなりけるとてよめる

和泉式部

[illegible]
大納言忠教卿まかりこしのいとまをこひ侍りし
[illegible]
[illegible]
[illegible]

このゝふみをうけとりて人事をはりさ
ゝ後行ゆく飛まかりこゝろゝゝて
人のこゝろをゝせて行ゝれゝゝよめる

後人こゝろ

この飛をいとゝ色さ物を者れゝつゝえしゝ事を思ゝて

ゝ

増基法師

我ゝ事ゝ乱ゝ生ゝ者ゝ思ゝ人ゝ者ゝ思ゝ人ゝ者ゝ思ゝ人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]流を[illegible]
[illegible]河院[illegible]時[illegible]

大納言成通

[illegible]

大蔵卿匡房

[illegible]
[illegible]
[illegible]

源義國書

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

関白家　敦大臣

[illegible]
新院位[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

よめる　　左京大夫顕輔

[illegible]

園殿院殿時歌川院に[illegible]

せられしかるべきかの歌

前参議好忠

[illegible]

ありまのゆまかりありもせよ

よめる　　宮内卿大臣

いかにまくらうるもたちぬるなるかの[illegible]

[illegible]人まうして[illegible]月[illegible]

よめる　　道命法師

[illegible]月の[illegible]

[illegible]

[illegible]月[illegible]

信濃守[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

在裕遠六

[illegible]

三条左政大臣 [illegible]

よめる

[illegible]

むすめ [illegible]

のあるうちに [illegible]

[illegible]

あるうちの [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

面影ゝ　　清原元輔

天暦のみとかのとき　　七月

七月　　紫式部

数よ女房の中よりとりあつめ

七夕後の夕　　紫式部

ひもとけて　　神祇伯顕仲

人の匠　　赤染衛門

後冷泉院御時　　義孝

川のゝ被　　藤原有信朝臣

人の四十九日の　　[illegible]

よりて行ふ女のまへゆきすれて
後行ふく船まゐりよをきれんとする

四條中宮

悔しさを見初めそめしかたみとて涙をとどめ
いとりのそうかのきつぬて行ふ

後人

かてのこころまさきの月をうつしてよのまことをあらはす
ねやのあるじとゆめうつつとをこそ思へ
ゆくとこの事ことりのへといふなり
こうりて新月をう法師の蓮よ社の中
ちりいひ知ぬ後ゆくこの
みちをもとめ思ふ事を思ひ伝ふ人ぬりのへとりを

加賀のうきとてこそ月のかたよりて
ひくよめる

選子内親王

思ふ人いむしてこそいふなる事をあれとこそ
信解品因流法師平餘年とつかをよめる

神祇伯顕仲

ゆくかつ分れ
即成佛とかふ事とよめる

よろづ人

君の男ぬきく佛ふかうるのうつあく後を知るなる
金利傳のつあくふ願成佛道のをと人く
ふよ中ス也ら伝ふふよめる

関白前左大臣

ゝゝゝ